

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（基盤研究（S））中間評価

課題番号	21H05031	研究期間	令和3(2021)年度 ～令和7(2025)年度
研究課題名	家畜の排卵・卵胞発育制御法の開発に資するエストロゲンフィードバック機構の解明	研究代表者 (所属・職) (令和5年3月現在)	東村 博子 (名古屋大学・生命農学研究科・教授)

【令和5(2023)年度 中間評価結果】

評価	評価基準	
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要であるが、概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれる
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(研究の概要)		
<p>本研究は、哺乳類のメスにおける卵胞の発育と排卵を制御するエストロゲンの正負フィードバック作用に着目し、神経ペプチドであるキスペプチンによる制御機構を、遺伝子発現やエストロゲン調節に関して解析しようとするものである。ウシやヤギなど家畜における実証研究により、家畜の排卵・卵胞発育障害などに対する治療法の開発と確立に資することを目指している。</p>		
(意見等)		
<p>本研究の進捗状況に関して、当初の目標に対して概ね期待どおりの成果が上がっていると判断できる。主に、ATPを伝達物質とするプリン作動性ニューロンがエストロゲンの正のフィードバックを仲介し、排卵中枢 AVPV キスペプチンニューロンを刺激することを明らかにして論文公表ができています。その他、関連事項の知見についても複数の同分野のジャーナルから公表ができています。また、遺伝子改変ヤギの作出に成功したことは評価できる。しかし、今後当該ヤギ及びウシなどの家畜を使った実践的な段階の研究へ展開することも最終目標の一つである。それによって本研究の真の成果が決定されるため、今後の研究成果に期待したい。</p>		